合奏（オーケストラ）の原点である弦楽四重奏、その理想がここにある。
ベルリン・フィル“最高の四人組”と、数度の共演で高評を得る
気鋭のピアニスト・笠原純子との絶妙のアンサンブル!

Philharmonia Quartett Berlin

Junko Kasahara, Piano

フィルハーモニア・カルテット ベルリン（ピアノ:笠原純子）

Program

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第7番 ヘ長調 op.59-1〈ラズモフスキー 第1番〉
Ludwig van Beethoven: String Quartet No. 7 in F major, op. 59-1 "Razumovsky, No. 1"

ショスタコーヴィチ:ピアノ五重奏曲 ト短調 op.57（ピアノ:笠原純子）
Dmitri Shostakovich: Piano Quintet in G minor, op. 57 (Junko Kasahara, Piano)

2016.5.20（金）7:00PM開演（6:30PM開場）▌兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール

Friday, May 20, 2016, at 7:00, Hyogo Performing Arts Center, Recital Hall ●兵庫県西宮市高松町2-22/阪急電鉄神戸線「西宮北口」駅 南改札口すぐ（連絡デッキで直結）、JR「西宮」駅より徒歩15分（阪急バス7分）

A ¥6,500 B ¥5,000（全席指定/税込） ●2015.12.22（火）10:00AM発売

チケット取扱
○芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255 ※10:00AM-5:00PM/月曜休み（祝日の場合翌日） ●インターネット予約 http://www.gcenter-hyogo.jp
○チケットぴあ 0570-02-9999 [Pコード:279-996] ○ローソンチケット 0570-00-0407/0570-08-4005 [Lコード:58740]
○CNプレイガイド 0570-08-9990 ○セブンチケット http://7ticket.jp/ ※セブン-イレブン店頭購入可
○イープラス http://eplus.jp/otonowa/ ○otonowa 075-252-8255 ※電話予約のみ/郵便振替口座:00960-8-322727 加入者名:オトノワ

※都合により、曲目・曲順・出演者等内容の一部が変更される場合があります。あらかじめご了承ください。※未就学児童の同伴・入場はお断りします。

▌主催/お問合せ:otonowa 075-252-8255
10:00AM-6:30PM/日曜・祝日休み 土曜不定休

▌後援:大阪ドイツ文化センター GOETHE INSTITUT /ジャポニスム振興会

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

otonowa
www.otonowa.co.jp

Philharmonia Quartett Berlin Junko Kasahara, Piano

フィルハーモニア・カルテット ベルリン（ピアノ:笠原純子）

ベルリン・フィルの顔 'フィルハーモニア・カルテット ベルリン'

音楽の歓びをこれほどまでに味わわせてくれるアンサンブルが、ほかにあるだろうか!
'Four of the Best' 最高の四人組、ロンドンのウィグモア・ホールにおけるデビュー・コンサートに対し、ある高名な評論家が感動とともに贈った賛辞である。
'フィルハーモニア・カルテット ベルリン'は、巨匠カラヤンとともにその豊饒な響きで世界一の名をほしいままにしてきたベルリン・フィルの首席奏者たちによって、1984年に結成された。メンバーの資質は、技術、自発性、集中力、様式感など高い次元で均衡がとれており、弦楽四重奏に必要なものは総べて備えている。
最高峰のオーケストラの"顔"としての四人は、激務のなかで"家族"のような親しさと深い信頼関係を育み、合奏の原点となる弦楽四重奏に日々磨きをかけてきた。
ベルリン・フィルのメンバーの練習好きは有名だが、四人はこれをはるかに上回る稽古を重ね、レパートリーは弦楽四重奏の原点であるハイドンから、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン、ブラームス、ヴェルディ、ラヴェル、バルトーク、ショスタコーヴィチなど、弦楽四重奏の歴史のすべてを包括するものとなっている。
互いの感動と息づかいを感じ合いながら、この四人だからこそ叶う唯一無二の美しさは、人々を魅了してやまない。
日本におけるその歴史は、1994年に開始され、その後1998、1999、2000、2002、2004、2007、2010、2011、2014年そして今回2016年で11回目の来日となる。
数多くのCDとともに、ザルツブルク音楽祭、カーネギー・ホールへと羽ばたいていった'フィルハーモニア・カルテット ベルリン'。かの有名なヴァイオリニスト、メニューインをして「いつもいつも聴いていたい美しさ」と言わしめた魔法の美しさは、弦楽四重奏の理想的な姿として今後も人々の心を酔わせ続けていくことだろう。

フィルハーモニア・カルテット ベルリン（ピアノ:笠原純子）　公演評（抜粋）

●フィルハーモニア・カルテット ベルリン(PQB)の結成30周年ツアー。PQBは小型のベルリン・フィルのように、滅法上手く清潔感がある。…後半は笠原純子が加わってブラームスの《ピアノ五重奏曲》。冒頭硬さがみられたが、提示部反復から俄然ノリが良くなる。展開部での笠原のピアノの粒立ちもよく、弦との対話もきれいだ。スケルツォはほの暗い情感と激しい爆発がまことにスリリング。気分の激変とヘミオラのリズム衝突、そして甘やかなトリオとの対比など、全く見事だ。終楽章も同様で、とりわけコーダのリズムをかえながら畳みかける頂点形成は、息詰まるほどで、笠原もPQBもその実力を遺憾なく発揮した。

横原千史氏/ムジカノーヴァ誌 2014

●ベルリン・フィルのメンバーによる室内楽アンサンブルの1つ「フィルハーモニア・カルテット ベルリン」の京都公演…後半はシューマンのピアノ五重奏曲でピアノは笠原純子。これがとても良かった。音響的にも構成や表現の上でも真に対等で内発的なアンサンブル力を発揮した。経過句などの緩急の扱いにもセンスを感じさせたし、第2楽章のアジタートの部分や3楽章の急速な音階パッセージも響きに丸みが保たれて心地よく前進。終楽章ではフーガとともに高揚感あふれるコーダをリードしていった。

根岸一美氏/関西音楽新聞（Classic Note）2010

「フィルハーモニア・カルテット ベルリン」が私たちを魅了する秘密がここにある

17・18世紀当時、まだ国家として統一されていなかったドイツでは、諸侯が各地に権勢を誇り、自慢の楽長や楽団を抱え、それぞれの地方文化を担っていた。
ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）はオーストリア・ハンガリー帝国のエステルハーツィ家に永く奉職し、この間に音楽の実践的理論を構築していった。「ソナタ形式」がそれである。
このソナタ形式はドイツ語圏で繁栄することとなったが、それにはドイツ各地に多数存在した諸侯お抱えの音楽家集団との相互作用が大きな役割を果たした。これら諸侯の音楽家集団は、技術的にも芸術的にも混沌としていた音楽形式の将来をソナタ形式に見出した。作曲家たちは、弦楽四重奏曲を原点、交響曲を頂点として、ソナタ形式の実践の場に提供し続けた。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらは、弦楽四重奏曲、交響曲の分野に、数の上でも価値の上でも、大きな足跡を遺したが、フランス・イタリア文化圏でのソナタ形式の進化には見るべきものがなく、「弦楽四重奏曲」「交響曲」のジャンルには極めて少数の作品しか存在し得なかった。
もちろん通奏低音を基礎とするバロック様式から、ウィーン古典派の様式へと、時代の要求が変わっていったことにも原因があろう。通奏低音に制約される中でのソナタ形式には、もともと限界があったからである。
こうしてソナタ形式による「弦楽四重奏曲」と「交響曲」は「ドイツの文化」として、数々の作曲家により膨大な数の作品群が生み出され、シューベルト、シューマン、ブラームスのドイツロマン派音楽がリヒャルト・シュトラウスによってその終着駅に到達するまで、ドイツの文化として発展してきたのだった。
ソナタ形式は、主調による第一主題と属調による第二主題が示される主題提示部、これらの主題が発展する展開部、主題が再現される再現部（再現部第二主題は主調）、それに終結部からなる楽式の一つである。ハイドンはこの形式の確立に努め、モーツァルト、ベートーヴェンをはじめドイツの作曲家たちはこの形式を継承発展させた。
弦楽四重奏団と交響楽団発達の歴史は、ソナタ形式なしには考えられない。これらがドイツ特有の文化であることへの認識が、ドイツにおいてすら、急速に失われて行くなか、「フィルハーモニア・カルテット ベルリン」は、あまたの弦楽四重奏団の中にあって、このドイツの演奏様式を理論的感覚的に継承している稀有の集団である。「フィルハーモニア・カルテット ベルリン」の演奏が私たちを魅了する秘密がここにある。
彼らがその30年の活動の集大成として、このほど完成させたベートーヴェン、ブラームスの弦楽四重奏曲全曲のCD録音によって「ドイツの演奏様式」が次世代に伝えられる意味は、極めて大きいと言わねばならない。

田中雅彦

●ダニエル・シュタープラーヴァ
(第1ヴァイオリン)
ポーランドのクラコウ生まれ。
数々の国際コンクール入賞歴を誇り、
1983年ベルリン・フィルに入団、
その後オーディションで
コンサートマスターに指名され
現在も第1コンサートマスター
を務めている。

●クリスティアン・シュターデルマン(第2ヴァイオリン)
ベルリンに生まれ。ベルリン音楽大学でトーマス・ブランディスに師事したのち、1985年ベルリン・フィルに入団、1987年から第2ヴァイオリン第1首席奏者の地位にある。

●ナイトハルト・レーザ(ヴィオラ)
ベルリン生まれ。ミシェール・シュワルベ、マックス・ロスタールに師事。奨学金を得てマイケル・リーにヴィオラを師事、1978年ドイツ音楽評議会コンクールに入賞後ベルリン・フィルに入団、2011年までヴィオラの首席奏者を務めた。

●ディートマール・シュワールケ(チェロ)
ハンブルク近郊のビーネブルク生まれ。アルトゥール・トレスター、ウォルフガング・ベッチャーに師事。1994年のベルリン・フィル入団以来、ベルリンフィル12人のチェリストたち、ヴァンサン・トリオ等、多数の室内楽グループのメンバーも務める。

●笠原純子（ピアノ）Junko Kasahara, Piano
4年間学費全免を受け大阪芸術大学卒業。塚本賞受賞。国際ロータリー財団により渡欧、パリ、エコール・ノルマル、ロシア国立サンクトペテルブルク音楽院大学院、ドイツ国立カールスルーエ音楽大学大学院（芸術熟達試験課程）、ドイツ国立ザールランド音大大学院（国家演奏家資格課程）を最優秀の成績で修了。ABC新人コンサートオーディション、ルービンシュタイン国際ピアノコンクール他、入賞。イタリア、フィンランド各地の夏期国際音楽祭、独・ザール音楽祭、ザールブリュッケン国際音楽祭、"シューベルティアーデ"、サンクトペテルブルク・ロシア日本芸術祭、国際音楽週間等に度々招待を受け出演の他、その演奏はヨーロッパ各国でテレビ・ラジオ放送されている。
ヨーロッパ各国、南米、ロシア、イスラエル、日本等でのリサイタルのほか、ザグレブ弦楽四重奏団、チェコ・フィル、ベルリン・フィルのコンサートマスターら首席奏者との室内楽や、日本センチュリー交響楽団、テレマン室内管弦楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、モーツァルト室内管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、クエンカ国立交響楽団、サンクトペテルブルク国立アカデミー管弦楽団、サンクトペテルブルク国立カペラ交響楽団、ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団等オーケストラとの協演も数多く、各国有力紙にて好評を博す。
現在、大阪芸術大学、京都女子大学講師。京都にてIMAマエストロを主宰、各地にて二十年近くのアレクサンダーテクニック研鑽を活かした演奏指導も行い、反響を得ている。(http://musicmaestro.jp)